容赦無しッ!!

人ではない?
ならば都合よし!

ある日拾った
金髪ロリ…自称『吸血鬼』
メスガキの分際で
不遜な態度…

わからせた先に待つ未来は…

性欲の限りを

叩きつけるッッ!!

ワカラセガタリ

・基本CG7枚
・一部服差分有
・セリフ&擬音差分有
・総CG枚数
100枚以上!!

金髪ロリ娘は

調教&調教

『よーし！気合入れて汚ちんちんしゃぶってなぁ！』
『…ん…うむ…』
こいつは近頃ワシ(53)がメス奴隷にした畜生だ。
人間じゃ無いのかって？信じられんかもしれんが
このメスガキなんと吸血鬼なのだ。

「助けてやったからなぁ。この程度は朝の挨拶みたく普通にやってくれんと。」
「……」
瀕死の吸血鬼のねーちゃんを助けたら
ねーちゃんがメスガキ化して従属した…。
何を言ってるのかわからないと思うが
ワシ(53)が一番解ってない。

『ん……ブラ…』
『おっ…ふ。よっしゃ。歯はたてんなよ。』
チュ
ん
助ける際に血を寄越せと言われたので
ザーメンを飲ませた。（血とか怖い…怖くない？）
結果、吸血鬼に精液を飲ませると奴隷化できるとわかった。
男子諸君は覚えておくといいゾ☆

「うーん…もっと献身的にご奉仕しろよぉ～？
物足んないんだワ。」

「(こやつ…調子にノリおって…っ)」

ジュ…ちゅ…

モミ
ミ

生き物を助ける…
良いことをすると気持ちがええ！
ついでにチンポも気持ちがええ！
一石二鳥じゃ！

「…(体を御されてさえ無ければ…このような汚らわしいニンゲンのオスなどっ…!)」
「じれったいなぁ…。」
チロ…
気持ちよくヌイてもらいたいところだが
齢数百年のプライドか?
ご奉仕へのためらいが見られる。
金髪ロリメス奴隷の義務をわからせねば…やれやれ

『(ひどい臭いじゃ…吐き気がする…こんな汚物いつまで口にさせる気じゃ…下等なオスめ…!)』
『やっぱ立場わかってないな…少し教育だな。』
レロ…
モニュ
モニュ
わからなければ体にわからせる。
メスガキであれば尚更だ。
世の常である。

「ハッキリ言って…」
「ちがう！違う…」

「お前にはちんぽ気持ちよくする義務があるんだぞ？
もっと身をいれてやらんかい！
長生きしてんならテクの〝一つ二つあるだろうが。」
ガポ
グボ
「お…ぅ…（～～～っ）」

「もっとしごけ！しゃぶれ！吸え！メスの本懐やぞ！
あ～じれったいが地味にくる…っ…おおっ！」
ジュププ
ゴポ…
ニ
「じゅぽっ…ずぽぽっ（食いちぎってくれようか！
ヒトの分際で…許さぬぞ…！）」

「おあずけッ!!」
ドプッ
コププッ
「んぼっっ?!」
キュンッ♡

「えっ！うおえっ！（急にっ）この量…苦…この汚液のせいでワシは…っ）」
ブパッ
ボタッ
「あ！てめえコラ！俺の子種汁を！
お前のエサでもあるんだぞ！
粗末にしやがって！飲め！」

ゴクン

『…お粗末さまじゃ…(酷い臭い…濃…粘り…これ以上飲めぬ…)』
レロ…
「主様に対する態度じゃないな。
優しくしてたらつけあがりやがる。
もうお前にオナホ以上の価値はないと思えよ。」

『…』
『なんだあその目。良くないな。躾だ。立て。』
『（思い上がりも甚だしいわ。
ワシにここまでしよって…ただでは済まさぬぞ…
自分の汚液で回復したワシにみじめに殺されるのじゃ主は。）』

『うっ…ぐっ…離せ！この劣等種族が！』
（なぜじゃ！未だに力が入らぬ…！体がまともに動かせぬ！）
「まだ主従がわからんか。所詮メス畜生だな。
俺のザーメンで生き永らえているメス奴隷が調子にのるな。
それにしても普通のメスガキと比べても力ないぞ？
本当に何とかの王様か？ぷに◎なの王か？（笑）」

「いッ…！ッ…馬鹿にするでない！本来の力が戻ったら貴様など即殺処分じゃ！
いッ…痛！…おなごのまともな扱いも知らん豚がー！
緩めろ！はよう離せ！」
ギリッ
ギリ…
「おうおう…いよいよ俺の童貞まで馬鹿にしちゃうの？
許さねぇ…それにお前はおなごじゃなくてオナホだろうが。
分をわきまえない金髪ロリメス豚にはオス豚のザーメンくれてやる。
はらめよ。」

「んなっ?!」「おっし気張れよ?メス奴隷の生業だからな。股は濡らしてるよなあ?」
「まて!まて!主は変態か!」「あ?」「交尾みたいじゃろ!やめよ!」
「そもそも何故陰茎を立てれる!◎歳児程の身体じゃぞ!」
「せめて大人の身体になってからじゃろ!
いかれとるのか変態め!」
まともなカタチ
ズンッ…!!
「馬鹿だな。男は『妊娠可能と思われるメスガキ』に
ちんぽ突うずるっこんで、はらませていいんだぞ。」「は?」
「よしそれじゃ…「嘘じゃろ?!これ…交尾?…まて主!汚液を
呑まされる苦渋ならこの際よい!頼む!交尾は「うるせえオナホだな…」

「ぎぃ～～～ぃ!!」

『あっ…！あっ…！痛…いだ…あ…ぬい…ぬいて…くれ……』
『お！まさか…初物か！マジかぁ…数百年間に渡って俺の為に処女守ってたんだな。ロリ奴隷の自覚あるじゃないか。えらいぞぉ♡』
「…はっ…はぁっ…そ…そんな…わけ……あっ！」
「ただ…お口の奉仕よりマシだがよ、おまんまんキッ過ぎ。ちんぽまるごと気持ちよくできねーよ。ぷ○あなに及ばねえぞ。」
『…その…粗末なモノ…あっ……はよ…抜かぬか…！』『OK早くヌクぜ。』
ズク…
グチュ…

「ほっ！ほいっ！ほいッ！」『ぃぢっ！あっ！あっ！やめっ！やぇっ！やめ…よっ！』
『お前でヌイてやってんだろが。気いいれんかい！』
『わ…ワシは…股から…陰茎を抜けち『おちんぽ』な？』
「…へぁ？」
「メス奴隷のお前がご奉仕する俺の剛直はな、『おちんぽ』だ。
『ワシのおまんこでおちんぽヌイて下さい♡』
お前の口上だ。言え。今後間違えるな。」
『ゲ…下種が！…クズが…！言わぬ！…はよ…抜け！』
ズッ
ズッ
ズッ
ズッ

「素直に言えば楽にしてやるのになぁ(ミシッ…ギリリッ!)」「痛!わかった!わかった!…言う……『ワシの…おまんこから…おちんぽ…抜くが…よい…!』」

ギリリッ

「ヌクがよい?(グリイッ)」

「うあ…っ!わ…わかった…わかり…ました!

『ワ…ワシの!おまんこから!おちんぽ!抜いてくだされ!』

「口上と違う」「う…ぐう…〜〜っ!……

『ワシの…おまんこで…おちんぽ…ぬい…て?ください…♡』

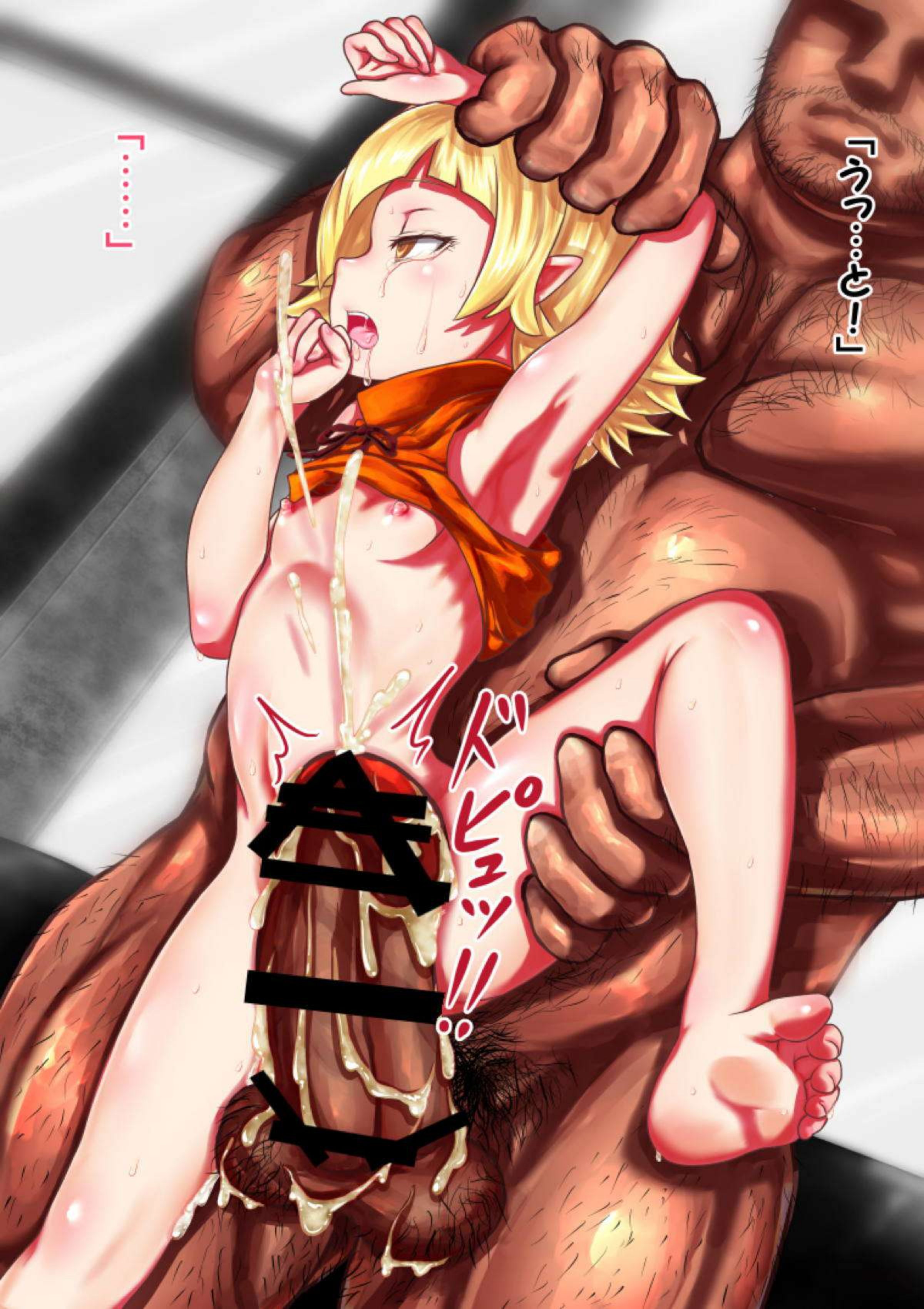
ギッ

ズムッ

「おーしギリギリ合格だな。ロリ奴隷に褒美だ。はらむといい。」
「んなっ?!あっ♡?!なぜっ!なぜっ…じゃ!言うたぞ!言うたぞ!たらぬか?!おちんぽおまんこでぬいて!!おちんぽぬいて!!言うたぞ!…あっ♡おっ♡?!」
「お…おちんぽ…♡ぬいて…くだされ…い…痛いんじゃ…痛くて…おまんこも…なんか…変なんじゃ!お願いじゃ!おちんぽ…ぬいてください!おちんぽぬいてください!いっ…!おちんぽぬいて!おちんぽぬいてぇ!あっ~~~っっ!!」
ゴッ
パンッ
ゴリュッ
バチュン
パチュンッ
パンッ
パンッ
パチュンッ

「うるせえ。」
ビクッ!!
ビッ
「あっっ…!!イッッ…ブ…あ…っっっ♡♡♡」
ドビュッ!!
ビュルルッ
ビクッ

「どうだ。無駄なプライド捨ててメス畜生になれて…気が楽になったろう。」
「は……ひゃ……あ……い…」
「約束通りちんぽヌイてくれた主様に言うことは？」
「……ありが…とう……ございます……」
「えらい！えらいぞ！よし！処女喪失記念にもう一つご褒美だ！」
「……？」
ハァ…ハァ…
ズルン
ズボッ


「うっ…と！」
「……」
ドピュ
!!
金

「まんこに入りきらんかった残り汁でぶっかけデコレーション！
金髪ロリ奴隷には映えるな！寸志だ！感謝せえ！」
「……うそ……じゃ……こん……な……ゆめ……」
ドロ…
「ハハッ現実見ろよ？あとでしっかりとわからせてやる。
お前がただのメス奴隷だってな。あとここ片づけとけよ。」
『……』
ゴプッ
ゴポ…
ツー

強めにわからせ始めてから数日が過ぎた。
あれから毎日このオナホでオナニーを楽しんでいる。
次第に従順になっていると思う。流石に立場を理解したか。
「どうぞ…どうかこの
金髪ロリまんこでご奉仕
させてくださいませ…」
「なんかやる気を
感じないなぁ～(笑)」
「……わ…わしの…
主様の『せいし』が着床済の卵にまたぶっかけてくだされ…」

『お？自分で妊娠したのわかっちゃう？』
『…ぬし様のおとなちんぽでわしのこどもまんこ幾度種付けしたと…主人ならもう少し優しいまぐわいを…』
『ちょっとまてい！種付けなんかしてねえ。ティッシュにザーメンくるんで捨てるのを種付けって言わんだろ？一丁前にセックスしたと思わんでくれ。』
『……もうよい…ならまた好き勝手使い倒せばよかろ…』

「おう」
のしっ
ズムンッ
「おんっ?!」
ドチュッ
「おおおっ!♡」

『ぐっ…ふっぬっ…おも…くっくるひ…』
「あ～毎度新鮮で
飽きがこない
いいオナホまんこだ。
偉いぞ。」
「あ…あるじさま…
…ちんぽっよ…い…
も…すこし…
…ご…ご慈悲を」
「よっし！ならいつもの『きもちいい』のでトばしてやるからな。」
ズプププ～
ピクッ
ピクッ

「ほらほらほらほら！」「あっ♡！あっ♡！んあ♡！あっ♡！」
「あっつよっ♡い♡！」
「も♡だめ♡きっ♡
きも♡ち♡いいっ♡！」
「おち♡おちん♡ぽ♡
に♡まけ♡るの♡！
だめ♡も♡
こ♡ころ♡して♡あっ♡」
「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡！」
あ♡
あっ♡
アッ♡
あっ♡
パンッパンッ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
ドチュッ
パンッパンッ

「じゃやめるか」「えぁ♡?!…あ…あ…う…あ…」
「ちん負けしちまう吸血鬼なんかただの生き恥だよな…。
すぐメるわ。」
ビタッ
「〜〜〜っ♡」
「や…待って…くだされ…」
「喋んな畜生。」
「う♡…待って…
…わしは誓う!
主様とおちんぽ様に
生涯服従すると誓う!」
「わしはご主人様のちんぽキモチよくするために生まれて
きたと骨の髄までわかった♡やめないで♡気の済むまで
しゃせーして♡お願いじゃ♡ご主人様♡」
キュン♡
キュン♡
ヒクッ
ヒクッ
ピクッ
ピクッ

「そこまで言うならっ！と！おっ！」
「いっ…きゅうっっっ!!」
ビュッ
ビュルルルッ
（……）

「ふうっ…スッキリしたわ。」「ちと遅いがやっとメス奴隷がどうあるべきかをわかったみたいだな。ま、励めよ。」
「あ…ひゃい……」
ヒクヒク
ハッ…
ハッ…
（…わし…おわったの…怪異の王たる尊厳も…誇りも…汚ちんぽに…折られた……よいか…もう…）
ピク…

「いつも通り後片付けはしとけな？」
「は…ひゃい！」
（全てなめとらねば♡）
「フーかよ。
俺のちんぽさ、
お前の家畜まんこで
汚れてんだけど…」
「あっ♡おそうじします♡！（おそうじせねば♡）」
ハァ♡
ハァ♡
キュンッ♡
キュンッ♡

「お～似合うな。」
「ありがとうございます♡」
「メス奴隷でも奉仕する際の格好ってもんがあるからな。主人に尽くす正しい姿勢…褒めてやる。」
「とても…嬉しいです♡」
ハッ
ハッ
ハッ
ハッ
「よしよし♡さて、どうすんだ？」
「はい♡わしのおまんこで汚してしまったご主人様のおちんちん…おくちでキレイにさせてください♡」

「よく言えましt「あもっ♡」
「おおっ?!」
「じゅぷぷ…じゅる…♡あむ♡…ちゅむ♡」
チュモ
ジュルポ
「待てもせんとは…もうちっときつい躾しないとな。」
「はも♡…じゅぼぽ♡…〜〜〜〜♡」
「ブッサイクな面してまでガッついて…堕ち過ぎ(笑)
吸血鬼どうこういっても所詮はメスだな。」

「喉奥までつっこんで綺麗にすんだよ。
歯を少しでもたてやがったら〆殺すからな。」
「おぐっ♡…んぶっ♡…おぼっ…ぽ♡…♡」
グポッ
ジュポ
グププ
「だんだん綺麗になってきたなぁ～いいこには
お駄賃やるぞぉ～ちんこ食道までくわえとけ。」
「お……んご……♡」♡

「おら！褒美…だぞ！飲め！呑め！」
ビクッ
「んぶっ!!♡ぶぶっ!!」
ビュルルッ
トプッ

「ふう～きもちいい！
メスの献身的な奉仕…悪くなかったぞ。」
「んぷう…♡」
ジュル
グプッ

「一滴たりともこぼすなよ？
ご主人の有難いザーメンだからな。」
（コクコク）
「じゅぼぼぽぽっ♡」
ズポポポポ
ジュルッ

「よっしゃ！ちんぽキレイになったど。
あとは飲み干すだけだな。
ご馳走は残さないのがマナーだからな！」
「ん……♡むぐ……♡」
（なんという……青臭さ……苦味……拭いきれぬ粘り……
口の中でおたまじゃくしが大暴れじゃ♡
苦しいが……飲み干さねば♡）
チュルン

「うっ…ん…んぐっ♡」
「ごぐんっ♡！」
「ゴクンッ」

「お掃除させていただき…
ありがとうございます♡
せーえきもご馳走様でした♡」
「おう。また溜まったらご奉仕させてやる。
クリと乳首たてて待つとけ。」
「はいっ♡♡」
ハァ
ハァ
ハァ

また数日後…
ワシ(53)も伊達に吸血鬼と体液交換はしてない。
身体機能が向上していたワシ(53)に襲い掛かってきた
若いにーちゃんを返り討ちにしたところ、
ワシ(53)のメス畜の元の体の足を手に入れた。
食わせろとのことで
くれてやったら…
これまた捗る姿に
なりよった！
そんなわけで今から
"使って"やるところだ。

「まっ…いきなり…お願いじゃ…せめて準備を…」
（元に戻り始めておるのに…また責め苦を…体の前に心が持たん…完全に折れてしまう…）
「そんなもの、あるわけないだルォ？ぶち込んでやるぜ！」
ギュ
グッ
捗るのはいいが…躾ける前にあった不必要な自我が若干だが戻ってしまったようにみえる。調教のし直しだ。面倒だぜ。

『えいしゃおらッ!!』
「ぐっ…ぎっ…づっっっ…!!」
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ズチュッ
ブチッ
ブチブチッ
ズンッ

「う…あっ…い…いたい…ごしゅ…じ…さま…ごじひ…ごじひを…」
「おお～何とええ心地！妊娠適齢期ど真ン中のメスの体してっとこうも気持ちええ穴っぽこになるとは！たまらん！生きててよがった！神様！いるならありがとうッ!!」
「う…あ…たすけ…うく…たすけ…て…」
ギチ…
ミリッ

「また破瓜してたか！かまわん！何度でも俺に処女捧げろ！何度でも膜破ったる！おら！」
「あっっ!!……やめ！……わしの……！赤ちゃん……部屋……ひゃめ！……こわ……れ……っっ!!」
「ちんぽ気持ちようする為には仕方ないだろッ！子宮最奥で射精してやる！今度はボテ腹にするまで流し込む！」
「はら……むの……いや……じゃ……っ！いやじゃ！いやじゃ！ごじひを！ごじひを！ちんぽやじゃ！ちんぽやだ！ちんぽ汁いやじゃあっ！」
ズンッ
ズンッ
ズンッ
ズンッ
パッ
パッ
パッ
パッ

「おおッ!!デるッッ!!」
「おっっっっ…!!おぁ…あっ!!」
ドクッ
ビュルルルッ

『あ～ここ最近ならベストバウト射精だったわ！』
『う…また…はらんでしもうた…
…こんな惨めなワシではおちんぽ様には敵わぬ…
十二分にわかった…たのむ…ゆるして…
たのむ……なんでもする…』
「なんでも？なら俺のちんぽお前のこどもまんこで
飽きるまでシゴかせてな！」
バタッ
ドロ…
トロ～
ドプッ
「……う…あ…」
「なんでもしろよ？」
「……」

ひたすらロリエロ奴隷を調教し、使い込むことまた数日…
中出しとザーメンデコレーションだけでは正直飽きてきた。
そんな折ふと、この『男の精を賜うだけのエロ凶器』を隅々まで
活用せねばとワシ(53)のゴーストが囁いた。
であれば、このエロ足を犯すべき。ワシ(53)の魂が叫んでいる。
行動あるべし。そして今に至るのだった。
「あ…足で…わが主様の…
ご子息を…？」
「そうだよ。足コキな。
その為のあんよだろ！」
「ん…うむ…(足だけで仕事が済むならよいが…)」
「あ、ちゃんと足裏の汚れナメとってからコイてな。常識だぞ。」
「む…無論じゃ(わしは変態の遺伝子を受精しとるのか…)」

「れる…ちゅむ…（主様の性癖には困ったもんじゃの…
……全く……♡）」
「足でご奉仕させてもらえんだ。
失礼のないよう入念にな。」
ペロ
ペチャ
「…っ!!!…ひゃい!
（い…いかんな…気を抜くと完全に隷属してしまいそうになる…
…早く体を取り戻さんとの……ふん…ちょうどよいわ…
今後は足だけですましてやろうぞ…もうおまんこは使わせぬ…
…わしのあんよで骨抜きにしてやるわ…♡）」

「始めろ。」
「ひゃえ♡」
（いつみても…おぞましい…
こんな剛直が容赦なく
わしのこどもまんこに突き立られておるのが信じられぬ…♡）
チュロ…
ボロンッ

「ど…どうじゃ？…こう…かの？」
「おお！思った通りの柔いあんよ！
足コキに適したエロいあんよとは思ってたがまさかここまで…
おっふ！もっと奉仕せえ！たまらん！」
「う…うむ♡」
（そ…想像以上じゃった…♡
剛直おちんぽにも可愛いとこあるではないか♡
これは…いけるやもしれぬ♡）
スチッ
クチッ

「意外と…弱いとこあるのじゃな♥おちんぽ様にも♡」
「そりゃ性器だからな！全身性器のお前ならわかるだろ！お！」
「そうじゃったの♡」
（わがあるじ様のこんな顔が拝めるとは…♡
少し楽しくなってきたの…♡）
シュコシュコ
シュッ

「む♡……この感じ……もうすぐ『しゃせー』じゃな♡
何度も種付けされてたら覚えてしもうたわ♡」
「てめ！おっ！図に乗る……か？！い……いかん！新刺激が！
……主として……漢として……甘い射精だけはいかんッッ!!」
「わからされた惨めな奴隷の気持ちも
少し経験せい……♡
……よいぞ♡……わしのあんよも妊娠させておくれ？♡」
ニュコッ
ニュコッ
ニュコ
ニュコ
ニュコ

「おおおッッッ!!」
びくっ
ビュッ
ビュッ

「ハァーハァー……」
（よくもこんな容赦ない吐精を…
これではわしの心身共にもたないのは
当然じゃ…♡）
「てめぇぇ調子のりおってぇ…
死ぬより辛いオメコ地獄でほじくり殺してやるゾ。」
ドロォ…

「穴、だせや。
膜どころか子宮も貫いてブッ壊してやる。」
ビクッ
（う…し…しかしこの『あしこき』は
使えそうじゃ…！
なにか…弁明を…そうじゃ！）

「ちが…メる前に聞いとくれ！わがあるじ様のざーめんもっと欲しかったのじゃ♡」
『…ほお…』
「学んだんじゃ♡その…落ちてた春画での…♡異なる『しちゅえーしょん』や『ぷれい』はまた格別なんじゃろ？」
『…』
「あくまで立場をわきまえない『ぷれい』だったんじゃ♡現にたくさんのざーめんをいただけたではないか♡」
『ふうん…』
「わしは身も心も主様に服従しきっておるよ♡」

「いただきま…ちゅ…うむ♡」
「ふむふむ…」
「ぢゅろ…れろ…」
（相変わらず強烈な…臭い…味も…う…♡）
（ここが正念場かの…『あしこき』でおちんぽ様の猛りを鎮められれば…そうそうおまんこ壊されることはなかろ…ざーめん…味わってなめとらねばの♥）
レロレルッ
チュロッ
スズズッ

「じゅっぽ…じゅるろ…じゅちゅるる…ちゅぷっ…ちゃぷ…れロ…えぁ…っこくっ…ごく…」
「んじゅぷっ…ちゅる…ちゅぷ…」
（んぐ…主様のざーめん…濃すぎる♥
呑みきるのに一苦労じゃ…♥）

『ん…うぶ…んぐっ♥んぐっ♥』
ズズッ
ゴクッ
ジュルッ
あむ…
ジュプ…

「う…ぷぁっ♡！
はぁっ…はぁっ…ざぁめん美味しゅうございます♥
（こんなに濃いのをこの量は…ちときついの…）」
「お前にとってはご馳走だからなぁ当然だよなぁ。
つかまだ全然残ってるけど…
え…何？残すの？〆とく？」
「ま…まさか…♡」
ハァ
ハァ
ハァ
ヌチッ
ドロ…

「じゅぷっ…ぢゅちゅる…♥」
「ごきゅん♡」
ちゅもっ
ぢゅるっ
ごクッ
ごクッ
ぢゅちゅ

「はぁ…はぁ…♡
わしのあんよについたざぁめん…
大変美味でした…♡」
「（うぷ…）
…その…まだメるのは…
待っていただきませ…」
ハッ
ハッ
プハッ♡
ヌチャ

『…』
「また足でご奉仕もさせていただきます♥なんでもします♡…手も口も髪もワキも乳首も全て使って奉仕します♥」
「わしが全身性器…主様の性玩具であること…思い出して♡…まだまだお楽しみ下され♥…以後立場はしかと弁えます…その…どうかまだ〆ないで…♡」
「…なるほど。反省はしてるんだな。わかった！」

「では〆は無し！殊勝なメス奴隷には生きオメコ地獄してやるぞ！」「う?!」
「あ？まさかいやとか？…〆？」
「う…う…あ…いや…」
「メスの役割はオナホまんこの提供。永遠におまんこしてもらいたくて懇願したんだろ？あ～またちんぽ勃ってきた！」
（い…いかん…本当に壊される…！なにか…工夫せねば…せめて壊されん為の…おちんぽ様の為の…なにか……）
――こうして調教は苛烈さを増しつつ続いていくのであった！――

あれから根気よく調教を続けた…。
一時期は反抗の意思もチラついたメス奴隷が
今では従順で立派な肉便器と化した。
まさしく「継続は力なり」、と言える。
続けていれば良い結果は生まれるものだ…。
ワシ(53)が調教を通じて得た教訓だ。
メスガキよ、ありがとう。

…具体的な良かった成果？

…そうだな…

例えば朝起きると…

「…あっ…♥起きてしまったか♥
上の方失礼しておるよ♥」
「おそようじゃ主様♥
朝から凶悪なご子息を
慰めるとこじゃぞ♥」
こうなっている。朝勃ちんぽの性処理はメス畜達の
ルーティンと化している。珍しい事では無くなった。
…なんで二匹になっているかって？
ある時、再び手にしたこいつの元の体を
食わせず、血を吸わせるに留めたら…
なんと増殖して一匹増えたのだ。
あの時は本当にビックリした。
あれからは…
二匹ともメス畜としての意識を
失う事無く、割と順調に従順になった。
むにゅん
むにっ
ぼて♡

「ボテ腹おなほーる…うごきます♥」
「ああ。いいぞ。」
「んっ♥んっ♥あっ♥あっつい♥」
「お加っ♥減…如何っ♥かのっ♥?」
「悪くないぞ。」
「あ♥…やた♥…うれし…っ♥」
「っ♥…っ♥…っ♥…っ♥」
ハッ
ハッ
ハッ
ハッ
むにゅっ
もにゅ
にゅくっ
たゃん

「はっ♥はっ♥んっ♥あっ♥はっ♥」
（主様のザーメンで膨らんだ腹の最大活用法じゃ♥
畜生にも意地はあるのじゃ♥
きもちいい吐精を実現させてくれよう♥
あるじさま♥好き♥好き♥）
しこっ♡
しこっ♡
しこっ♡
しこっ♡
むにっ♡
むにゅ♡
にゅるん♡
むにん♡
「んっ♥んっ♥あっ♥あっ♥あっ♥」
（倫理も常識も越えた…
性暴力の化身♥わしらメスはたまらん♥これが雄…♥
これが人間の男…♥好き♥好き♥だいしゅきじゃ♥）

「でるぞ。こぼすな。」
『んっっ!?んっっ♥♥♥!!』
ビクッ
ビュルルルッ
ビクッ

「はぁ…♥はぁ…♥」
「はっ…♥はっ…♥」
「おいおい…俺の射精に興奮して乳噴き出してんじゃねえよ…」
「すいませぬ♥つい♥」
「少し早めの『ぶれっくふぁーすと』じゃの♥」
「そうじゃな♥」
「主様の種付けでできたわしらの金髪めすろり妊娠奴隷ミルク…主様の雄臭すぎるざぁめん…朝から栄養満点じゃ♥」
「主様にご奉仕できて栄養もいただける…♥すごいのじゃ♥一石二鳥じゃぁ♥」
ハァー
ハァー
ハァー

「「あ♥」」ピクンっ♥
「おん？」
「い…いま…わしらの胎の子がうごいた♥」
「よ…よろこんどる♥
わしらと一緒によろこんどる♥」
「胎にいながらも主様に
ご奉仕できてうれしいのじゃ♥
うむ♥わしらの子じゃ♥」
「お産の前から
主様に尽くせるとは…♥
わが子ながら少し妬けるの♥」
ハッ
ハッ
ハッ
ハッ
ピク♡
ポコ♡

「あ、そうだ。今日ちょっとやってみたい事あるんだったわ。」
『なんなりと♥♥』
「堕胎プレイ。人間にはやれるわけないからさ。てめえは腹パン。おめえは胎児入りオナホまんこでご奉仕だ。」
『えっ？♥…え…！♥…はい♥♥』
「なるべく赤ちゃん死なんよう気張ってけ。」
ドキ♡
ハァ♡ ドキ♡
ハァ♡
ハァ♡
ハァ♡
ドキ♡ ドキ♡
キュン♡
キュンッ♡
ヒクッ♡
『はい!!♥♥
好きに使い潰してくだされ♥♥
我らがご主人様♥♥♥』
～こんな感じで一日が始まるのが日課になった。毎日気持ちええ。生きてりゃイイ事あるもんじゃ。目の前に落ちてるチャンス…掴めドリーム!!～
記・ワシ(53)
FIN